2023 年 2 月号

Community & Friend

有限会社アルファー
大阪府高槻市氷室町 4-13-3
吉田 清一郎

過去の月間通信は https://www.alphar-net.com/monthlymail.htm

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 2 月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。

小豆島の裏山の掃除に手を付けた。ここは敷地の北東の角に位置し、またこの真北に上っていくと役行者が見つけた場所があり、そこには祠が寄贈されている。年が明け 1 月 2 日は、朝からこの祠に至る道の藪をチップ・ソーで刈り払う事が習慣になっている。

そもそも、此処に来たのは 2007 年だったように思う。当時は世の中が終わると思っていた。世界的に変遷という大波にすべてが掬われると思っていた。2020 年に・・・。

それでシェルターのつもりで、イザとなれば、ここに逃げ込む事を真剣に考えていた。でも、それから、此処でしばらく落ち着いていると、落ち着いている場合じゃないと思い始めた。

情報というのは、不完全で、従って自分で補う必要がある。当時は 2020 年という時の切り方をしていた。だけど、時代が進むとそうではなく、それは 2020 年から 2025 年迄、5 年間に掛けて波が来ることが分かり、それでは、こんな処にいる場合ではなく、その準備をすべきだと思い始めた。気づくのが遅く、間に合うか間に合わないか、時間との戦いを始めた。半ば諦めていたが、到達点が判明すると、変遷の中身が次第に判明した。特に 2020 年のコロナ騒動が始まると、その後は手に取るように、その進展具合が分かるようになった。

弊社だけではなく、顧客・仕入先、さまざまな取り組み企業のビジネスにどのように活かし、またその方向を『暮らしやすく暮らす』道筋に、如何にズラしていく事が出来るか、これを問うようになった。

世界覇権国家が推移して来たように、これから中華人民共和国になる、と云う様な事ではない。ローマ教皇の宗教から、ユダヤ資本のお金に、支配が変ったという事でもない。

『変わらない』というところへ変るという事である。

では、変らないという事は、どういう事だろう。第一にあげられる条件が均一化である。富める者とそうでは無いものとの間にギャップがあれば、それは『変る』要素を内包している。『変わらない』という事は、そこに軋轢が生じないことと、イコールである。

普通の目で眺めてみると、一人の王様に対して、王様以外の全人民という事になれば、そこに軋轢が生み出されるのか？　答えは『生み出される』と思う。

生み出されないとすれば、太陽という神と、その産物である自然とが、同等の神に扱われる世界観のみの様に思える。人間の歴史に於いて、かつてそのような時代があったかと問われれば、私自身は『あった』と答える。

そこから、現在まで変わったと捉えれば、現在からまた、『あった』と思われる時期に変るという事で、これは換わるという事かもしれない。

言ってみれば、吸う息と、吐く息のようなものにも捉え

る事が出来る。徴税と納税が対ならば、そのどちらも無い状態が想像できるかどうかで、もし出来るなら前回の『あった』時期から、此度の『変わらない』はどのような進化を遂げるのか、まこと楽しみな話しとなり、長生きはしてみるものだと思う。

習近平は、ゼロコロナ政策を著しく緩和したそうだ。先月書いた胡錦涛の共産党大会の退席で江沢民と書いたが、胡錦涛の間違いである。その劇中劇で上海閥の排除が出来たのだろう。次に入って来る情報は、これまた先月書いた MSB（ムハンマド・ビン・サルマーン）に習近平直々に会いに行き、石油決済代金をドルではなく人民元で支払うという話しをして来たそうだ。プーチン政権の終焉がいつかは知らないが、輸出支払い通貨を、親米国家からの制裁を逆手に取り、ルーブルに限定している。

1971 年 Gold から Oil に通貨の担保は変遷した。ドルと Gold とが切り離され、世界は混乱した。これを治めるためキッシンジャーはサウジアラビアに飛び、Oil の決済にはすべて米ドルを使う取決めをさせ、信用を無くした米ドルの後ろ盾に、世界中が必要とするエネルギー代金を充てた。2000 年 11 月イラク・フセインが Oil 決済をドルからユーロに切り替えた。その結果はみんなが知る通り。その方針に逆らえば、暴力的にみな排除される。

では、今回習近平氏は攻撃されるのか。習近平には未だ役どころが残っている。むしろ、ドル離れを加速させる役割を演じている。ゼロコロナ政策を緩和するという事は、上海閥(鄧小平以来の親米)の封じ込めを完了し、自らが中国経済再急成長への道を開き、衰退していく親米諸国のインフレ圧力・エネルギー不足で経済が混乱している間に、世界経済の牽引役に進もうとしているように見える。

プーチンは、昨年初頭にウクライナに侵攻し、見事に世界を 2 分し中国に接近した。二人は阿吽の呼吸で動いているとしか思えない。もし、そうだとすると、この二人以外に誰かが筋書きを描いているとしか思えないほど見事な連携ぶりで、非米諸国の台頭の条件化が整って来ている。ピリオドは何処で打たれるのか、それは 2025 年に照準が合っているような気がする。その様に考えると、あと 2～3 年である。となると、本当の大波は 2025 年になり、波が去った 2026 年にはガラリと世界は変っているだろう。米軍が沖縄に駐留するのも 2025 年迄である。だから、日本の軍事予算は 1%から 2%に伸ばす議論をしている。

さてさて、我が国はというと、まるでそんな必死な世界とは隔絶されたところを歩いている。『子や孫に借金を残すな』とか騒いでいたことを嘲笑うかのように、無尽蔵に政府は国債を発行し、日銀はどこ吹く風でそれを引き受けている。こんなお気楽な国は世界広しといえども、日本だけである。国家が株式会社の様にバランスシートで判断する事自体が愚かだと思うが、それは政府の借金は国民の資産になる構造だからである。この国の民が世界一金持ちなのは、国家が世界一の借金国家だからだ。他の通貨より、どれだけでも借金できる構造の円は、世界的に買われる事になるだろう。間違いなく円は強くなる。しかしそれは 絶対的な強さではなく、相対的でしかない。

世が混乱する 2025 年は少なくともドルは大暴落する。すべては、その為の準備の工程にあると考えれば、今後どのようになって行くかが分かる。もし、この機会を生かすなら、日本人がもう少し賢くなる必要がある。

Gold の裏付けもなく、Oil の裏付けもなく、いくら国内で無尽蔵に円が刷れるといっても、国際的な信用を受けるには、やはり現物の裏付けが必要である。保証人もなく、担保もなく、この会社を遣って来た自分にはよく分かる。では、如何して来たかというと、信用保証協会を利用した。つまり、金本位制とは、Gold を持っていそうな者の保証を担保に通貨を発行し、それが世界基準になるという事だ。その構造があれば、ユダヤ資本は各国の中央銀行を手放せる。つまり通貨発行権を手放せる。 なるほどなあ～

すべて私的な想像だが・・・・・

有限会社アルファー：吉田清一郎